

ジャック・ザ・リバー セラピー
 〈切り裂き魔〉的外科療法 vs. 未来派療法

エニフ・アンジョリーニ・ロバート Enif Angiolini Robert (1886-1976) 著

アブドーメン サージカル・ロマンス
 『女の腹部 — フィリッポ・トンマーズ・マリネッティ共作外科小説 UN VENTRE DI

DONNA: romanzo chirurgico con Filippo Tommaso Marinetti』(Facchi, Milano 1919) 邦訳 (その3)

清瀬 卓

〈Sommario〉

Il romanzo di Enif Angiolini Robert consiste in due parti, dal punto di vista sia del suo contenuto che della sua forma letteraria. La prima parte che viene raccontata nella forma di diario, si svolge nel mondo della medicina del tempo, trattandosi di un intervento chirurgico, così detto “alla Jack lo squartatore”. La seconda parte in forma epistolare tradizionale si riferisce alle esperienze personali di combattimenti, che ha vissuto la nostra scrittrice nel periodo della sua convalescenza tramite Marinetti, il suo corrispondente, nei campi di battaglia della Grande Guerra in Europa.

La Prima Guerra mondiale ha introdotto la nuova tecnologia, appena sviluppata e applicata alle strategie ed operazioni belliche, in un modo talmente radicale da aggravare la condizione dei soldati, che erano costretti, in realtà, a combattere con maschera antigas nelle trincee contro i carri armati. Il nuovo stile e linguaggio caratterizzato più che altro dall’ utilizzo delle onomatopее nella seconda parte, riflette fedelmente non solo la realtà della vita dei tempi di guerra, ma anche la trasformazione fondamentale della condizione umana nell’epoca, per così dire, di *Sachlichkeit*. Non a caso la nostra protagonista tende volentieri a passare dalla terapia chirurgica poco valida alla sua malattia al culto del movimento artistico di Futurismo, ancora nascente.

8. 大地のどてっ腹に塹壕という巨大な術創がある

(IL VENTRE DELLA TERRA HA UN’ IMMENSA FERITA CHIRURGICA DI TRINCEE)

エニフ・ロバート宛マリネッティ書簡：

《拝啓

貴女^{あなた}がご自身の病気とその苦しさについてお書きになっていることを拝読しますと、小生はたいそう悲しくなります。でも、決して悲観なさってはなりません。元気になって頂きたい。

こう書きますと、貴女^{あなた}はお笑いになりましょう。そして、きっといくらかの厚意のせいにされるはずです。それは間違いです。例えば、今日、貴女^{あなた}の腹部に起こっている出来事が、深刻極まりない予兆^{よちょう}であることをご存知でない。実を申しますと、貴女^{あなた}の腹部は、塹壕^{ざんこう}という巨大な術創^{じゅつそう}がぱっくりと口を開けている大地にそっくりなのです。

あなた^{あなた}の注意をご自身の^{じゅうそう}術創^{じゅうそう}の傷口に向け集中させようとされるこだわりは、我々^{しゅうねん}の執念^{しゅうねん}と一致しています。我々は^{きょうへき}胸壁^{きょうへき}から身を乗り出して、敵の陣地との境界地点をジッと注視します。40メートルから50メートルか、時には20メートルから30メートルぐらいの距離です。普通の人が見れば、^{どこ}何処^{どこ}にでもある地面です。泥と草と小さな^{くぼち}窪地^{くぼち}と^{じゃり}砂利^{じゃり}と^{かんぼく}灌木^{かんぼく}と。ところが、^{げんししゃ}幻視者^{げんししゃ}の小生の眼には、それは幻想的で、^{シュール}超自然^{シュール}で、^{ミステリアス}神秘的^{ミステリアス}で、^{ダイナモ}頭腦^{ダイナモ}的な地面なのです。

あらゆる地点が意味を担っています。あらゆる石ころは、^{バイアス}心的な電荷^{バイアス}がかかった^{ダイナモ}発電機^{ダイナモ}さながらに、^{くさむら}精神集中^{くさむら}するのです。草叢^{くさむら}は思考し、ぬかるみは光を見つめ、光を回避することで、^{かいひ}人殺^{かいひ}し集団^{かいひ}を回避した兵士に好運をもたらした^{よろこ}慶^{よろこ}びに^{ひた}浸^{ひた}るのです。^{あいろ}隘路^{あいろ}の唐草模様^{アラベスク}は、人間の運命を準備したり阻止するために、^{カーヴ}曲線^{カーヴ}を描き、手直されています…

敵の^{ざんこう}塹壕^{ざんこう}、つまり大きな傷口のひとつは、それを眺める人間には、永久に配置換え不可能に思えます。^{ばくげき}爆撃^{ばくげき}によって生じた大地のあらゆる^{へんぼう}変貌^{へんぼう}にもかかわらず、^{ひら}ぱっくりと口^{ひら}を開いた大きな創口の上には、永遠の感覚が支配しています。攻撃と反撃の^{おうしゅう}応酬^{おうしゅう}は、かかる永遠の^{ルール}掟^{ルール}のように思われるのです。

小生は、この中間の地面の心的な価値を研究してみたいと思ったのです。それで、昨夜、夜明けまで帰還してはならないことになっている^{せつこうへい}斥候兵^{せつこうへい}に混じって出かけました。

小鳥や昆虫たちは、戦争など一向に気にしていません。小鳥たちはしきりと^{さえず}囀^{さえず}り、虫たちはブンブン羽根を鳴らしています。大砲は沈黙しています。小生の足元で、植物や動物の^{いのち}生命^{いのち}が、盛んに活動しています。ところが、暗闇のなかで転倒することを恐れるあまりに、小生が感動を味わうことがようやく出来たのは、夜明けになってからでした。

疲れきっていた小生は、^{しょうこう}曙光^{しょうこう}とともに、身を隠せる大地の^{ひだ}襞^{ひだ}に、同僚といっしょに横たわりました。

そこは、^{オーストリア}オーストリア^{ざんこう}軍^{ざんこう}の塹壕^{ざんこう}から100メートル地点でした。^{こがねいろ}黄金色^{しょうこう}の曙光^{しょうこう}が、長く青い尾を曳くように、斜めに射ってきて、^メ手術刀^メのようにキラリと光りました。

小生は、あなた^{あなた}のことを考えました。

我々を指揮していた^{ちゅうい}中尉^{ちゅうい}は、我々が^{ルート}道順^{ルート}を間違ったので、明るい光の中、^{さえず}遮^{さえず}る物がない地点を退却しなければならないと云って、^{いらだ}苛立^{いらだ}っていました。時間をかけて、^{ずいぶん}随分^{ちえん}と遅延しましたが、無事なんとか帰還いたしました。大佐は我々を呼びつけ、猛烈な説教を垂れて叱りつけました。まるで自分の手術器具が見つからないので、カッカしている外科医そっくりに思われました。彼は最後に、それを開いた^{じゅうそう}術創^{じゅうそう}の中に見つけるのですが！

^{シンボリック}象徴^{シンボリック}的で…^{アナロジカル}暗示^{アナロジカル}的で…小生は我々の新たな作戦行動によって、大きな創口は^{きすぐち}早急^{きすぐち}に閉じられるだろうと確信しています。

あなた^{あなた}の^{きすぐち}創口^{きすぐち}にも祝福を申し上げます。 F.T. マリネッティ 拝》

マリネッティは気を細かく使って、わたくしを励まそうと、別に書籍を数冊届けてくれた。便りを書くと、返事をくれる。届いたばかりの音信に、わたくしは無限の喜びを感じる。菌を喰い

しばって、わたくしから逃げていかなないようにしっかりと攫^{つか}んでいるので、自分の生命^{いのち}は、まだわたくしに精神的な陶醉感^{とうすいかん}を与えてくれると実感する。未来派の人々があんなにも果敢に防戦に努めているというのに、どうして芸術の情熱的な闘いにわたくしは挑戦しないでいるのか？

ジュリオは、わたくしが他の事を話題にして、まじかに迫った終焉^{しゅうえん}という固定観念^{こていがん}から僅かでも自由になることを慶^{よろこ}んでくれる。

幸・不幸がくり返される間に、復活祭^{イースター}になる。いつになく高い発熱に、医師は少し吃驚^{びっくり}する。ジュリオと母とアルベルティーナやもうひとりの拿破里^{ナポリ}の女友だちは、わたくしを説得して、11月までに著名な医師に頼んで、不運な腹部^みを診てもらえばと云う。

わたくしは、気が狂ったように拒む。

「やめて！ もう教授なんかまっぴらだわ！ 専門家は、御免蒙^{ごめんこうむ}るわ。」

マンジャガッリの診察を受けるようにと、悲しくなるほど執拗^{しつよう}にわたくしに懇願^{こんがん}するジュリオに、わたくしは何らじゅうぶんに応えられないどころか、こう怒りの返事をした。

「この部屋の戸口に、ちらっとでも教授の髯^{ひげ}が見えでもすれば、露台^{バルコニー}から身を躍^{おど}らせてやるから。」

救われる手段として、3階から飛び降りる考えが、幾たびもわたくしを魅了した。

その時まで外科手術の必要性を否定してきた担当医が、診察は必要だとはっきり主張する始末だった。おそらく、そうして責任を軽減したいのだろう…

ジュリオは、子供や自分のためにと哀願^{あいがん}する…アルターニ教授がやって来る。わたくしは婦人科の外科医に対して、とても頭に来ていたので、彼の質問^{ていねい}に丁寧に答えようとしな。ところが、美貌^{びぼう}の彼の大人びた人柄^{かも}が醸^{かも}し出すやんわりと包容力^{ほうようりよく}のある柔和^{にやうわ}な雰囲気と振る舞いや信頼感と落ち着きに、わたくしはすぐにも負けてしまう。彼は、わたくしの症状に同情して、くり返しこう云う。

「奥様、あなたはもう8ヶ月間もこのような苦痛に耐えておられる！ …我慢^{がまん}にも限度があります！」

「教授、わたくしは結核^{わづら}を患^{わづら}っているのでしょうか？ …はっきりおっしゃってください…」

「詳しく検査しなければ、そうでないと断言することはできませんが、多くの明白な症状からすれば、絶対にそうではないと申し上げたいところです。でも、とにかく納得して頂くために、一度わたくしの医院^{クリニック}にご足労願います。まだ残存^{はうごう}している縫合糸^{ほうごう}を除去してみましょう…」

わたくしは反抗し、拒否する。彼はジュリオに助言して、少しでもいいから辛抱強くわたくしを説得するようにさせる。

4月14日、外科手術は受けまいと心に誓って、その医院^{クリニック}に出向く。ここで、様子を見守ることにする。果たして自分の哀れな腹部に結核菌が存在するのかどうか、それが知りたい。入院期間の終わりに、新しい教授がそのことを明らかにしてくれるように希望する。

別世界にいる感じだ。教授の愛情^{あふ}溢れる配慮に驚かされる。羅馬^{ローマ}の専門医の刺々^{とげとげ}しい尊大な態度に馴^なれきったわたくしは、気持ち^なちが和らぐ。ジュリオも友人たちも女友だちも、今回のわた

くしの苦しみを慰めてくれる。

優しさに、あらためてわたくしは負けてしまう。それは4月17日のことだ。彼らは、とうとう不安と表面に出ない遠慮^{えんりょ}とに満ちた《ハイ》という承諾^{しょうだく}のことは、わたくしに吐^はかせてしまう。

看護婦^{ナース}が、この度も例によって《お化粧^{トワレット}》の処置を行う。わたくしは、すでに術前に行われる所定の処置を承知している。あまり抵抗なく、必要な処置にわたくしは従う。かといって、手術を受ける決心をしたわけではなかった。剃刀片^{かみそり}手に、看護婦^{ナース}が作業をしている間に、一通の手紙がわたくしに届けられた。それは、マリネッティからのもので、その猛烈なエネルギーは素晴らしい。ゴリツィアから届く。美しい書体は、抒情性^{あふ}に溢^{あふ}れていたが、乱れている。わたくしの注意は、粗末な紙片に走り書きされた回転^{せいこん}が速く正鵠^{せいこく}を射た考えに釘付けになった。

マリネッティからエニフ・ロバートへ。

《拝啓、はっきり申し上げますが、もし小生^{あなた}が貴女^{そば}の側に居たなら、治療してあげていることでしょう。冗談抜きです。小生には確たる方法があります。聞いていただきたい。

理論——健康というものは、我々を生命^{つな}に繋ぎとめているありとあらゆる欲望・体力の総体のことです。重篤^{じゅうとく}な病気のすべてに、これらの結び目の綻^{ほころ}び乃至劣化が見られます。

生きる理由がたくさんあるかぎり、生きているものです。この理由が次第に失われてゆくと、死ぬことになります。

だから、病気が治るためには、強^{きょうじん}靱な結び目によって、生命と新しい靱帯^{じんたい}でしっかりと結ばれる必要があります。

その実際——毎日、貴女^{あなた}は、見聞したり夢に見たりした何か愉しいことを考えて下さい。例えば、見たり触れたり食べたり飲んだり抱きしめたり自分のものにしたいと思うものなどです。

魂とか精霊とか身体とか書物とか絵画とか旅行とか…

例えば、明け方にアフリカ^{アフリカ}の紺碧^{こんぺき}の停泊地^{ていはく}へと滑るように走る美しい高速船に乗って、足の裏でその躍動を聞く快感を考えることです…石器時代の静けさや…白亜^{はくあ}の粗末な家屋や、浜辺^{ビーチ}に打ち寄せる泡^{あわ}に混じって、裸身の子供の絶え間ない身振り豊かな叫び声や…すべすべしたエナメル・パンプス^{おぼろ}しながら寝そべった子供たち…それに緩やかな椰子^{やシ}の団扇^{うちわ}を。

春の朧^{おぼろ}な月明かりに静脈を切って気絶したカプリ島を想像してみるのです…肉慾の光明が、悦^{もた}びの悶え^{もだ}さながらに打ち震えています。島は、至福の海に浮かんでいます。

貴女^{あなた}の魂^{おぼろ}すべての最高の表現である詩歌^{ポエム}を書くことを思ってください…

愛する男の芸術的行為やその天分を、愛の営みによって数百倍に増幅することを考えるのです…

貴女^{あなた}の美の理想的な化粧^{けしょう}を考えるのです…

貴女^{あなた}のすべての衝動^{しょうどう}を総動員して、慾しいと思わなければなりません。

それが執着となり、思いつめた気持ちとなり、〈肉慾^{くきび}〉に打ち込まれた神聖な楔^{くさび}となる必要があります。

慾望の対象に触れるか見たいと考えるだけで、心臓^{ハート}が早鐘^{はやがね}を打つ必要があります。

こうした治療の1ヶ月が過ぎると、貴女^{あなた}はご自分の中に強大な力が暴れまわり、不名誉な病魔^{あば}の網^{ネット}を何としても断ち切るように感じることでしょう。》

（わたくしには、自分の脇腹をヒクヒクさせる不本意な癩癧^{かんしゃく}がある。）

「駄目^{ダメ}、駄目^{ダメ}よ、お願いだからよして。そんな風にやるのなら、このわたくしが外科手術^{オペ}を貴女^{あなた}にしますよ！」

善良な尼僧^{シスター}は、左手で素っ裸^{す ばだか}の腹部を押さえつけて揺れ動かないようにしながら、剃刀^{かみそり}を右手で握ったままじっとしている。

「それって、不本意だったわ…今は、微動だにしないでじっとしているつもりよ。」

マリネッティの手紙を再び読み始める。

《病魔は一種^{ネット}の網です。それは、突如跳ねたかと思うと、尾鰭^{お ひれ}の一撃で憎たらしい漁船を20メートルは蹴散らす鋼^けのように柔軟で肉付きのよい立派な鮪^{まぐろ}が、のた打ち回る魚網^{ぎょうもう}そっくりです。

慾望^{じょうじゆ}を成就^{じゆうじゆ}させることです。血潮をほとばしらせて、是非とも手に入れたいものを襲^{おそ}うことです。

こうした治療を、小生は敗北した魂^{すす}には勧めたくありません。ところが、貴女^{あなた}は強く気高く誇らかにでいらっしゃる。貴女^{あなた}は実に頭脳明晰^{ずのうめいせき}で、闘志に燃え、まるで病魔というひどい暗礁^{あんしょう}に建つ燈台^{とうだい}さながらに思われるのです。

こうした慾望療法のことは誰にも話さないで、実践して頂きたい。慾望を組織立てることによって、この世の生命との燃えるような靱帯^{じんたい}を強化するわけです。そうすれば、人工的な若さ——新たな慾望の貯蔵庫——新しい生命体が生ずるのです。

2ヶ月すれば、貴女^{あなた}に会いに出向くつもりです。恢復^{かいふく}された貴女^{あなた}の姿に接したいとの願望は本当に強く、執拗^{しつよう}なのです。頑張ってください。

E.T. マリネッティ拝》

9. 未来派療法（LA CURA FUTURISTICA）

エニフ・ロバートからマリネッティ宛に

《心強い無二の友へ

意気消沈^{いきしょうちん}したわたくしの気力を奮^{ふる}い立たせるような素敵なことをば届けて下さってありがとうございます。

拝読しながら、一抹^{いちまつ}の光明^{こうみょう}がわたくしに開けて、より広い地平線に差し込み、病魔にほとんど打ち負かされた生命力の微弱な律動が、ふたたび誇らかに激しく脈打ち始めるかのような気がしました。確かに、貴方^{あなた}はわたくしに新しい道を示して下さった。それは、刀圭^{ドクター}家たちや科学^{サイエンス}の無益な饒舌^{じょうぜつ}さが足を踏み入れたことのない未知の通路^{ルート}です。それにしても、その饒舌^{じょうぜつ}さのた

めに、長い間わたくしはひどく苦しめられただけで、病気はいつかによくなりませんでした。

そこで…欲望療法を！

ただ、貴方は経験上、〈達成〉の歓喜がどれほど長続きしないものであるか、既にご存知のはずです。それに人生でわたくしの心を〈強い絆で〉魅了するものがあるとは思いません。たとえ、それが強力であり持続性があったとしても。

しかし、貴方の素晴らしい衝動は、斜陽の哲学の緩慢な反対をことごとく消し去って、論理の深い省察を避けるように仕向けます。意志力の効果を緩和することなのでしょう。一方、わたくしに必要なのは、震える神経のすべての束で、かかる唯一可能な救済をしっかりと把握することで、それには猫のように精力的に、一か八かの解放を賭けた文句なしの一大跳躍を執行すればよいのです。

わたくしの魂がほとんど致し方なく受身の忍従を受け入れる結果になった茫然自失のきわめて深刻な危機に際して、貴方が差し伸べて下さった助けに感謝致しております。

わたくしは、悲観的ではないが、苦い微笑みを浮かべて、強い魂のはかり知れない自我が許容できる目覚しい治療力に無関心な大先生たちの頭でっかちな理詰めの論法を歓迎してきました。

今日、貴方のお便りを拝読するなかで、期待感や辛い思いは、楽観主義と希望の活力溢れる息吹に一掃されて、どこかへ行ってしまいました。

貧弱でお粗末な分析を行って、詳細に考え巡らすことは致しません。新しいことばを有難くお受け致します。それを自分のことばとして、優れた職人に相応しく、健康に転換すべき欲望の柔軟性を創り出したいものです。生命のもっとも効果的な論拠は何か、病魔に向かって最大のエネルギーを放ってくれるもっとも強力な絆は何か、やがては貴方に申し上げるつもりです。

すでに自分のうちに光輝く結び目の塊があって、明日へと空想力の翼をかりて、もっと鮮やかな結び目に思いを致しています…

かかるわたくしの健康的な覚醒の打ち震える最初の挨拶を、潜在力を活性化する素晴らしい洞察力の持ち主である貴方に送ります。そして、わたくしは晴れやかな感謝と信頼の気持ちを込めて、貴方に握手を致します。

四月。

エニフ・ロバート拝》

その同じ晩に、ジュリオはあらためてわたくしと一緒にマリネッティの手紙を読んだ。彼は、ほとんど見知らぬ人物が遠くから差し伸べてきたとても有難い支援に感動を覚えた。

もっとも繊細な生体の神経系が命じたり蒙ったりする直感的な引力とか反発力という説を認める必要がある。もはや、わたくしは自分が麻酔と手術に耐えることができると感じていた。

翌日、わたくしは身内の者たちや医師たちのあらゆる予測を超えて、動揺など見せず、平然と自ら麻酔用の面蓋を着けて、瞬く間に眠りに落ちてゆく感覚に細心の注意を向ける。

ほとんど間髪を入れず、猛烈なブーンという音が耳に聞こえ、寒暑の感覚を心臓に感じ、激しい動悸がして、大脳は考えが混乱してもたつくの何とかしようと奮闘し、心臓はますます

ぎゅっと強く締め付けられ、もう…してゆく。

…それでも、わたくしの病気は快癒^{かいゆ}しなかった。五月半ばだというのに、開腹手術創が執拗に塞^{ふさ}がらないままに、わたくしはまだ入院している。アルターニ教授は、わたくしにどう説明してよいのか戸惑っている。彼は最善を尽くした。もはや科学^{サイエンス}の限界を超えていた。

…再度、このわたくしが開腹手術を受けない限りは…

あらゆる予測に反して、その考えはわたくしを狼狽させない。むしろ愛想よく慈父のような態度を取る外科医に、もっと手術をしてくれとわたくしは頼む…彼は躊躇^{ためら}っている。わたくしに場合によっては最悪の事態が起こりうると彼は云う。ひょっとすると、わたくしは麻酔から覚醒できないかもしれない。彼は結果を保証してくれない。

こうした状況下では、人生は何ひとつ魅力的に見えない。いっそのこと、あの世へ行く方がましでは…

「教授、どのような処置でも構いません。ただ打つ手がないとだけは云って欲しくありません。」

「それは…われわれは治療を進めてゆきます…やってみなければ…」

ところが、人事を尽くす可能性があるとの信念が、彼の善良な眼差しからは全然うかがえない。彼は無能であることの悲しみ——他のもの悲しい出来事を思い出していた…自分の若く俊敏な息子を、ほんの数ヶ月前、死から救い出すことが出来なかったのだった…

わたくしは、ほとんど負け戦ながらも、長い期間わたくしの病魔と闘ってくれた善良な主治医に、新たな決意を告げてみる。哀れな腹部をもう一度切開して、最後の勝負に賭ける決意を…どうだろうか。うまくいくだろうか。

彼は、きっぱりと止めた方がよいと云う。

「奥さま、申し上げますが、それは同じく狂気の沙汰です…死を選ぶようなものです！ 自殺行為です！ ゆっくりと時間をかけて治すことはできます…」

4月19日に行われた最後の手術は、本来の意味の開腹手術ではなくて、腹膜まで切開して、絹糸で縫合した箇所がまだ残っているかどうか調べるだけの処置であったが、術中わたくしの生命が危険^さに曝されるような一瞬があったと、彼はわたくしに語って聞かせる。

著名な熟練^{グエテラン}の外科医の執刀^{しつとう}のもと、ある瞬間に、ピュッと僅かだが体液が噴出した。それは、まるで小さな膀胱^{ぼうこう}³⁴⁾が破損したかのようだった。外科医は手術を中断した。腹膜と膀胱^{ぼうこう}を傷つけたのではないかと心配になった。実際は、そうではなかった。わたくしの血液中に混じって孤立した例の体液は、謎のままである…

「奥さま、あなたは実に不可解な存在です…」

教授は、わたくしの腹部から剔除^{てきじょ}した標本に関して、検査室がすでに行ったはずの検査結果について、もっと正確な情報を伝えるために、羅馬宛に手紙を書くようにわたくしに薦める。彼もまた羅馬^{ローマ}の同僚が診断で下した〈予想〉に、ほとんど納得していなかった。本当に結核菌が卵管内に認められたのかどうか知る必要があると云う。

「化学的検査³⁵⁾によって、彼らだけがそれを知ることが出来ます…」

剔除標本の検査は実施されなかったとの返事が、ローマから届く。何故だかわからない。わたくしの教授の文面は、以下の通りである。

《細菌が存在しないとわたしの判断は間違っていない。教授は、(縫合用絹糸に対してとは申しませんが)ご自身に対しては実に厳しい方なのだから…その診断に大いに納得しています。確かに、〈おそらく〉とのことばは、実施されなかった検査だけを代弁するものです。くり返しますが、専門的な臨床診断は、申し分なく疑問の余地もないほどに、はっきりしています。両側の卵管は乾酪化した2個の膿瘍を形成していて、その結果、あらゆる最新の補助資料を使う検査室の仕事をまったく不要なものとしています。細部に立ち入ることは出来ませんが、もし、貴女が…敢然とそのトピックにもう一度言及したい未来派的な欲求を感じられるようであれば、このことを口頭で申し上げるつもりです。念を押しておきますと、乾酪化した塊はすっかり剔除されておりました。ただ惜しむべきは、転帰が良好でなかった…こと等々です。》

今日の晩は、気を紛らそうと、マリネッティが提案した未来派療法のことを熱心に考えている。

わたくしは、あくまでこうしたいと思うことに徹底したい。この欲求を苦悶にまで強化し、それを達成すべき目標に向かって集中させること。目標とは何か？云うまでもない。それは一番成就し難く手の届かない馬鹿げた目標、つまり未来派の女流作家…になることだ。

わたくしはすぐにも貧しい意志の反故全部をかき集めて、『外科的予感』と題する自由な随想1巻を執筆して、それをマリネッティに届けるつもりだ。

早速仕事に着手する。

「尼僧、用紙数枚と墨壺を。」

そして、前進する。

『外科的予感』(SENSAZIONI CHIRURGICHE)

光る大きな窓から、太陽の眩しい空の輝きが、白く白く白くポツと射してくる[沈黙]。病める肉体の日常的な責め苦に慣れて、純真無口で小柄な尼僧たちが、実に優しい表情を作って微笑む。嫌な硝子製手術台の冷たい接触に、身体はゾクッと悪寒を覚える——冷たさ——温かい裸体の震え。用心深く激しく動悸を打つ心臓は、背後を衝いてくる搦め手の攻撃に備える…小柄な醜い看護婦は忙しく、テキパキと迅速的確に立ち回る[沈黙]。大きく正面の壁に大書されているように。禿頭の気難しく冷たい〈科学様〉が、ぞっとするほど剛直に入ってくると、心臓は苦しくてドキッとなる。

両手とむき出しの両腕にそそがれる水の声。長い長い純白の白衣に緊張した面持ち。腹部に隠れた病魔を濯ぐ温水のパシャパシャという音。

側腹切開術という腹黒いことばを脳髄にくり返して、やがては？[沈黙]〈ラパロトミーア〉。魂は無限にくり返される二語の螺旋を注視して魅了されているが、それを固定すること…その

恍惚状態は、助手の医師の見かけの陽気さに邪魔される。彼は忠告してくれる友人で、望み通りの気晴らし。光沢のある可愛い爪に注がれる振れた注意。ビリビリと張り詰めた神経に、繊細な洗練がおろそかにされてはいない。単なる機械的な微笑みと心臓の震えが、期待を隠せと、無用なおしゃべりゲームに警告を発する——やがては？ おそらく「沈黙」いつもながら相変わらず…手でくすんだ色の小壇を捧げ持った小柄で色白の細心の女医は気安い。「ほら、ここだ」と、眩しい白地に、ただ唯一の黒い点は、諸々の想念から想念へと眩暈がするほど猛烈な速さでグルグルと廻り続ける。想念は簡潔で、ゆるぎなく確実に明解そのもの——くすんだ色の小壇の誘惑。そして、不動のゆったりとした眼差しの背後に、抜きつ抜かれつする観念の働き。空想に遠く離れた親しい人々の面影——待ったなしの信頼の衝動——「先生、あなたの手に、わたくしの精神をくるんでいる肉体を委ねます」という無愛想な〈科学〉への信仰告白は、唇の上でのことばの滅亡。厳めしい〈科学〉殿は、犠牲者の山に臨んで、それに理解も示さず、分かってもくれない。

魂は、ドゥーゼの慰めのことばの中に、激しく閉じ籠もる。彼女は選ばれた類稀な存在で、《従容として甘受すること》を告げてくるのだが、その慰安は切迫した拷問に挫折する。貧血した顔に麻酔用面蓋が近づく。肉体は本能的に恐れをなしてもがく。最初に、嘲囃仿謔の油断のない嫌な悪臭が脳へと昇ってくる。面蓋が強く押し付けられている間、窒息するような抵抗の叫び声——逃れようとする本能——助けを求める——びくともしない強力な両手が、蛇のような痙攣を押え込んでしまう。諸観念が絶望的に駆け巡る——またもや恐るべき思考の集中——唯一まだ残された自由——わたしを自由にさせてよ!!!! ことばは、細かい網目でペシャンコにされ潰されて、愚痴をこぼす。怯えきった眼は執拗に探し回る。身近な顔に、当初は優しく、今は攻撃的でキリリとした表情の変化を認める。[沈黙][沈黙]冷酷な口調にクラクラする太陽——逃げようとする無駄な努力——万事塞翁が馬と受け入れること。脳髄が猛烈に鼓動を打つ。頭の中でしきりと振動する鈴の音が、チリーンチリーンと鼓膜をつんざく鋭い響きをたてている。急に止むと、不意の静寂——突然の不動——逃げてゆく生命の緩やかな波動——停止した車の重くゆっくりとしたふたつの和らいだノッキング。?????? 一瞬の覚醒。一世紀が経過したという最初感覚。小さな苦悶の表情——軽くこめかみに置かれた尼僧のほっそりとした指——感覚があるが、身動きができない——まだ萎えた四肢に、死とは何かを理解する。第二の感覚。それはサラサラという鉛色の絹の音——半睡状態の顔をやっとの思いで開くと、友人のピアノカとルチアの顔を認める。尼僧が彼女たちを静かに引き取らせる様子を、包帯され混濁し衰弱し切った意識で察する——引きとめる気力もない——全身が燃えるような耐え難い突然のひどい熱、氷を、氷を、氷だ…微笑とも苦悶ともつかない作り笑いを浮かべ、唇は緩やかに引き撃つて皺が寄る。

…生命が息を吹き返す…そして苦痛は…

マリネッティからエニフ・ロバートへ

《拝啓 貴女の書状を拝受致しました。実に独創的で深遠そのものです。ご立派で、結構です。

あなた
貴女の才能には洋々たる未来が開けていることを保証いたします。

あなた
貴女の健康状態には、一切言及されていません。未来派の慾望療法を開始されたものと拝察致します。目下、あなたのために小さな指導書マニュアルを書いているところです。読んで暗誦あんしやうして頂くために。

小生の生活をお知りになりたいでしょうか？

小生は、ヴェルトイバの塙オーストリア太利軍塙ざんこうから 60 メートルの距離の不潔で悲劇的な泥濘ぬかるみにいます。でも、小生は、一度も夢見たことがない女性にこの命いのちを捧げは致しません。

昼夜を問わず、途絶えることのない砲撃ほうげきのシューツという天蓋アーチの下で、小生は砲座と連絡ごう壕と予備隊ざんこうと塙砲兵隊こうの壕の指揮をまかされました。

それらは、ちょうどモリナーリが戯画かりかちや化して描いたリーダ・ボレリ36)のように、痙攣けいれんを起こした頼りない緩慢かんまんすぎる純白の花火です。

それらは、素早い無数の火炎であり、未来派の夕べで保守派が我々に示す愚にもつかない態度のようなものです。

ミラノの市電のことごとくが、小生の頭の上を飛び跳ねながらひっきりなしに走っています。

小生は腸抜きされたこの原野の脂あぶらぎった穢きたない小腸——交通壕の泥濘ごうの糞汁ぬかるみの中を漂ただよい、はねを飛ばして奮闘ふんとうしています。泥の通路のすべては、唯一のただっ広い便所——塙太利オーストリア=洪牙利ハンガリー帝国に通じています。

糞くそまみれの長靴ブーツを佩いた脚とダンテの爪つめで泳いでいます。いかがわしい括約筋ソツツァリスつかつやくきん³⁷⁾の溶解ようかい。新聞記事の残るかなりのジョリッティの糞。

日の出とともに、兵士たちは肌着を掲げて、虱退治シラミの必要性を感じています。ちょうど批評家が書評の本を再読してもらおうと上梓じようしするかのよう。

シラミ
虱だけが、英雄の血液で栄養を摂取します。

40 メートル幅の敵の塙ざんこうを、小生の砲から発射された最初の 6 発の砲弾でペシャンコにする痛快よろこ極まりない悦よろこび。10 分後、300 発の手榴弾しゅりゅうだんが、手当たり次第に味方に向かって執拗しつように投げ込まれてきたからには、きっとクラウトの将校用炊飯施設に命中したのです。味方の地下電信小屋がひとつ破壊されました。

熱く燃える恋文ラヴ・レターにも匹敵ひつてきする大砲で狙い撃ちすること。遠く離れ離れになった口づけは、眼に見えもしなければ、耳に聞こえもしません。逆に、狂おしい放送電信ラジオテレコムセックス的抱擁とか、むしろ電話中の接吻に匹敵する爆撃をお見舞いすること。小生が今すぐ人々に差し上げたい二つの特許状…

ありえない奇蹟きせきが起こって、もし当地の塙ざんこうで小生とご一緒されるようなことがあれば、一瞬にして貴女あなたの病気は癒えましょう。もうひとつの未来派流治療原理もありますが、小生の考えを貴女あなたに説く時間的な余裕よゆうが、今日はありません。早速、小生の指導書マニュアルをお届けしましょう。標題タイトルは『慾望—想像力療法』となっています。

あなた みもと エール
貴女の御許に激励をお送り致します。敬具

F.T. マリネッティ 拝

わたくしは、未来派以外はもはや何も信じない。幸いにも、アルターニ教授はわたくしに対するこれ以上の手術は避けたいと思っている。彼は完全に閉鎖した創口をほんの少し再度切開する前に、10センチ弱やってみるだろう。またわたくしは腹部の無垢な肉に海草を7センチ挿入する過酷な治療を受けて、殉教者の長い日々を過ごす。

人の体温が、創口に広がる。そして、創口がほんの僅か開いてくる…これぞ拷問だ。

それから21日間というもの、硝子製套管³⁸⁾を、真っ赤の無残な切開口に深く差し込まれたままだ。恐ろしい苦しみを味わう。刀圭家には愛想が尽きたが、されるがまになる。

発熱と口渇の苦悶の一夜。夜通し看病してくれる看護婦が、わたくしに彼女の恋を打ち明けてくれる。(彼女はわたくしの文章がうまいとの噂を聞きつけて)彼女は、口説いてくる警官宛に、恋する善良な娘の気持ちを伝えてほしいと、おずおずとわたくしに頼んでくる。わたくしは求婚者の最初の手紙に、通り一遍の返事を認める。彼女の驚きの情熱は、お祝いの手紙に感動した尼僧たちが女子修道院長に対して示す純粋な恵存の気持ちにどことなく似ているので、わたくしはそれを愉快に思う…

忍耐強く丁重な助手のジーリ医師は、わたくしの未来派的果敢さに興味を持つ。彼はわたくしの著述を読んで、批判し、微笑む。教授もやや皮肉な態度をとる。

「ああ、神経質だ！ 未来派の気違いどもと同類とは！ …」

未来派は、あなたたちに比べればずっと正気だ。彼らは石頭を象徴的に切開して、眩暈を覚えるような大胆な行為の原動力——躍動的な天才の閃きを、そこに射込む。一方、あなたがたは冷徹に白い腹部を八つ裂きにして、ヒクヒクと脈打つ生きた肉体を研究してばかりいる。

10. 太陽とわたくしの腹部との会話

(CONVERSAZIONE FRA IL SOLE E IL MIO VENTRE)

頭に一発ガンとくらう。サンタ・マルゲリータへ発つ。わたくしは、刀圭家や病院のことを考えてゾツとなる。超能天気で不思議な信頼感を、太陽に覚える。太陽と海がわたくしの病を治してくれるだろう。そう確信する。

妨げになるものはない。わたくしの決意にとって万事が好都合だ。12時間後に、わたくしは立派な旅館に着いている。

凶暴な太陽は到る処に勝ち誇ったように横溢し頑固かつ執拗で、庶民の大祭しながら無償で万人に神々しく提供されている。ところが、わたくしは、帝王薬のように、わたくし専用に高貴な調合を実施してから、それを独り占めしたい。

わたくしは、左右を石壁で囲まれて人の視線から遮断された広い露台を思いのままに使う。わたくしは部屋着の釦を留めもしないで、裸のまま安楽椅子に横たわり、腹部を太陽に曝す。

灼熱の恒星は、即座にその驚くべき野蛮な凶暴さを發揮して、情容赦なく手加減もせずに、わたくしの術創に襲いかかってくる。わたくしは、太陽の無数の視線がこぞって、その光りで

術創じゅつそうの眼めしを盲めしいながら透過してくるのを実感する。灼熱しゃくねつの火炎かたまりの塊かたまりは、ことごとくが快い痛みと緩やかで迅速な狂暴さを伴って、術創じゅつそう深く透過しようとする。それはかき擁ようくような愛撫セックスであり解体でもある。

わたくしの腹部の毛穴全部が開いて震えふる、逃避とうひしたいと思っている口である。

わたくしの術創じゅつそうは、正確で混乱した危惧きぐの念に燃えている。それがまるで火口のように、拡大してゆく感じがする。わたくしはその術創じゅつそうをとくと眺めて、とても小さい創きずなので吃驚びっくりする。きっと 30 億ないし 40 億の太陽蟻の巢営アリスの苦しみすえいが、そこに含まれているに違いない。地球よりも巨大な太陽のすべてが、わたくしの術創じゅつそう中に存在する。その周囲には、下がついてゆく熱の同心円が、微妙な搔痒感そうように中断されて、幾つか広がっている。軽微な苦痛かすの微かな縞しまが、脇腹をぐるりと一周する。

それは、微かな痛みヴェールの面紗かぶを被った快感の発作だ。でも、まるで愛情が恋愛と激しい戯たわむれで、野蛮さを支配し養分を供給し慰めを与えてくれるように、太陽の熱がそれらを支配し養分を供給し慰めを与えてくれる。

太陽の火の圧倒的な威力に曝されて、わたくしは半ば意識を失って、失神状態おちいに陥おちいってゆく感じがする。やがて、わたくしは正氣しょうきに戻り、注意して自分の腹部を調べ始める。

眺めても触れてみても、筋肉の弾力的硬さと云い、天鵝絨ビロードのようにすべすべした表皮と云い、魅力的で、瑕みりよくひとつなく完璧で若々しく、実に美の極致だ。欠点きずが、ただひとつだけある。それは神秘に満ちた恐ろしい例きずの創だ。

曖昧あいまいなナイフによるある種の致命傷ちめいしょうに慄おのき恐怖しているような形態を考えてみる。それは、屍体たいの口はすでに閉ざされて、あの世で安心立命あんじんりつめいしている時に、必死になって話し語りかけてくる創きずだ。

わたくしの創きずは、わたくしの口以上に雄弁であることは確かだ。

メッシーナ・レヅジョ＝カラブリア大震災³⁹⁾の10分前、船乗りの幾人かは、煌々たる満月の鋭い月影のもとで、突如として海面がメッシーナ海峡の岸から対岸にかけて、幾何学的正確さで、金属のように大きく陥没する有様を目撃した。その時の海全体は、右も左も銅板のように不動のままだった。ということは、地下の穹窿アーチが一瞬にして崩壊したために、一地点でメッシーナ海峡の地盤が開いたことになる。

これは、わたくしの腹部が自分に示唆しさしてくれる限りない類似点である。サンタ・マルゲリータ湾は、おそらく緩やかなそよ風に震えている金剛石の索ダイヤが巻きつけられた柔らかい官能的な腹部ではないだろうか。この微風は、洋琴の効果を伴って、絹シルクと薄紙でできた指先を、わたくしの創きずの縁に軽く滑らせる。その一方で、幸せにもこんがり焼けるわたくしの腹部と、眩まばゆい太陽とがくりひろげる興味深々の対話は明確になり目立ったものになってくる。

太陽——「自分自身を忘却ぼうきやくせよ…自分を解放せよ…お前の不安を解消せよ…四肢を伸ばせ…果汁たっぷりのすべすべしたお前の凸面に、力パワーの溶岩を流し込んでやろう。不似合いな装置が作った創きずは問題でない。海面に權かによってできた創口がきれいに閉じてしまうように、吾輩わがはいがそ

の創を完全に閉じてしんぜよう。」

腹部——「わたくしは何も憶えていない…もはや遠のいた頭脳の思索、そのすべてを。わたくしとともに、わたくしのために痙攣する喉は遠のいて、その恐怖をわたくしは意に介さない。四肢をことごとく伸ばしきったわたくしは、貴方に捧げられている。灼熱の護謨でできた貴方の巨大な口の中で、わたくしは快感にとろけてゆく！ どうか貴方の灼熱の暴威を手加減してほしい。自分は、焼き窯でこんがり焼きあがる麵麩のような気がする。中身の生命の息吹はより濃厚になり、黄金色の外側の凝縮度は強化される。でも、わたくしは炭化するのではないかと心配だ！」

太陽——「心配ご無用。吾輩が切開を入れ、開創⁴⁰⁾し、攪拌し、切除を行い、縫合し、死の病原菌を焼き払ってくれよう。神経組織の末梢部分を全部きれいに梳きつけ、結合組織や細胞同士^との連合を再建して、血管のポンプにあらためて生気を吹き込んでしんぜよう。すべては、吾輩の螺旋状の長い指と液状の無尽蔵な炎の早業でござる。」

腹部——「失礼しました。わたくしは貴方の意のままです。ご随意になさって。わたくしは、どのような意識からもほとんど自由になっています。四肢から切り離され、無人格で、身軽に感じています。貴方が光の中で焼き払う熱気に魅了されて、わたくしを情熱的に吸い尽くす貴方に向かって、わたくしは立ち上がる…さあ、切って！ 傷つけて！ バラバラにして！ 切り裂くの！ 晒しものにするの！ わたくしは隔々まで貴方のものになりましょう。貴方の御意のまま！ 刺し貫いて！ あるいは粉々にして！ 黒焦げにして！ こんな風に、もっと、もっと…。」⁴¹⁾

わたくしはまるで灼熱の襟巻きの鋼鉄製発条さながらの太陽に、包帯をされ、掴まえられ、ギュッと縛り上げられている感じがする。それは、素っ気ないただ一度の愛撫だ。しかし、この愛撫は、同時に無数の濃やかな愛撫へと増幅する。大気の電離化したあらゆる塩分が、徹底した同調作用をする。塩分子が毛穴という毛穴で震えている。太陽と海と雲とわたくしの腹部との間に帯電現象が生じる。わたくしの皮膚は、強力に電解質化して塩化ナトリウム⁴²⁾や沃素⁴³⁾や臭素⁴⁴⁾をたっぷり含んだ大気を貪るように呼吸する。わたくしの極めて敏感な鼻孔は、塩化カルシウム⁴⁵⁾やマグネシウム⁴⁶⁾や燐⁴⁷⁾やリチウム⁴⁸⁾を嗅ぎわけける。わたくしの腹部は、一個の祝福された肉の乾電池なのだ。

より微細な粘膜や弁膜や管腔の隔々まで、名状し難い多福感が侵入してくる。

神経質な表皮上を、光線が末梢神経の先端にチクチクと刺すような刺激を加える。これが影響となって、振動が全身の栄養補給をつかさどる中枢神経に伝わる。わたくしの全身はすっかり快活になる。ラジウム⁴⁹⁾やウラン⁵⁰⁾やトリウム⁵¹⁾の放射線が、手順通りに、不溶性単一ナトリウム・ウランを可溶性ウランに変質してゆく過程を実感する。

胃上部の重い感覚は消えていた。加速する頻脈⁵²⁾の不安は去った。ほら、ご覧。正確で厳かな律動を刻む血液は、速度を緩やかに落としている。血液の酸素濃度と生体組織の有益な燃焼が、鬱血解消作用および溶解作用と極楽的植物相の発汗を促進してくれる。

わたくしは3時に眠り、とても物憂げな薔薇と紫はしどい色にすっかり染まった黄昏時に覚醒すると、わたくしの新しい外科医となった太陽を、徒に自分の周囲に探しまわった。そして、わたくしは、緑色の手袋をはめている手と黄金の絹帽子だけを見た。それらは、湾の入り口から力なげに優雅な挨拶をわたくしに送っていた。

太陽と自分の腹部との長談義に耳を傾けていると、わたくしは疲労を覚え、気晴らしをしたくなって外出してみた。すると、二人の若者が、わたくしをしっかりと見詰めた。ということは、わたくしはまだ気を引く対象であり、やつれ切った女ではないということなのだ。

うきうきした気分の陽光と香気に誘われて、わたくしはポルトフィーノめざして、舟艇で、漣を立てて海腹を滑って行った。

でも、わたくしは自分の病気に拘っていた。だから、眼に入るのは、お腹ばかりだ。ポルトフィーノの小さな停泊地までが、外科手術で血まみれになった腹部に見えてくる始末だ。

混雑して、ゆらゆらと揺れ動く舟。一匹の海豚を釣り上げる船員たちのわめき声。

海沿いの遊歩道にそって、露台や回廊や縁側や鶏小屋を大儀に担っている家屋、その黄色に紫に桃色と薄紫色の家並の下に、帆と帆柱が林立して揺れ動き、きしむような音を立てていた。嘲うかのように泡立つ海水の厚い房飾りの中で、人間の雌鶏や雄鶏や雛鶏たちが鳴き叫んでいた。その水面を、致命傷を負った海豚が痙攣気味にパシャパシャと叩いていた。

30人の漁師は、一斉に腕に力を込めて、鉤棒で海豚を岸に引っ張り挙げていた。ところが、立派なその海豚は、素早く身体をくねらせて、彼らを海に引きずり込もうとした。

長い櫂で二人の漁師が殴りつけたが、舟の竜骨に、その尾鰭が幾度も炸裂した。一方で、その引き裂かれた腹からは、洋紅色の鮮血がどっと吹き出していた。

ぞっとするような痙攣を繰り返しながら、従容として海豚は最期を遂げようとしていた。自分の周囲を広く取っていた。テカテカの背中を猛烈にバタつかせていた。それは、真っ裸の闘士たちが、ガブリと四つに組み合ったかのようなだった。護謨と金属製の太索に無数の電流が走ったかのように思えた。ポルトフィーノの小さな停泊地は、もはやその血で真っ赤に染まっていた。まるで血腥い世界大戦の素敵な排水溝だった。

海腹は、単に一匹の海豚を出産したに過ぎなかった。むしろ、神聖な雄々しい男性の部分が、ひっそりとした停泊地の腹部を陵辱して、血まみれになったようなものだ。今は、腹部は緑がかった蒼紫色に、じくじくした日蔭でまどろんでいた。

予期しなかった光景が展開する間中、わたくしは悴んだ両手を舟艇の座席の上に置いて、釘付け状態になったままだった。わたくしの歯は、ガチガチ音を立てていた。神経が昂ぶって、ありとあらゆる幻覚が生じ、やや熱っぽかった。腹部は完全に包帯されて、弾力性のある実用的な帯でギュッと強く括ってあったとはいうものの、わたくしは自分の創口がパツクリと大きく裂けて、血が滴り落ちる恐怖を実感していた。

意志の力で自分に打ち克ちたいと思った。坂道に沿って、沖合いを望む小さな教会堂まで同伴してもらった。水平線を一望しても、安堵感が得られなかった。海豚の断末魔が眼にチラついて、

どこまでも波が打ち寄せてくる中で、わたくしの心は落ち着かなかった。波は、多分わたくしにとってだけだったろうが、極めて生々しく陰惨な鮮血色に染まっていた。

雲は、英雄のように勇猛果敢な太陽の顔面を覆うホンモノの包帯だった。

木々も同様だった。中庭の二本の木は、松葉杖のように枝で身を支えて、根を足のように引きずっていた。障害者の木々は、太陽の血液を滋養としていた。

星は、戦場の応急処置が誤った縫合処置になるように、大空とわたくしの腕に傷を付ける。

赤十字社の看護婦のような紅白の帆が、一列に水平線に見える。

サンタ・マルグリータの冬の午後。加熱した太陽。憔悴状態。海に面したテラスの緑の深い肘掛け椅子に身を横たえた気だるさ。無限世界に到達して、怪獣でいっぱいの半分閉じている両眼。

生氣のない蒼白の脊髄麻痺の右隣女性は、たぶん淡い恋物語を連想させるようだ。ビクリとも身動きしないが。

胸と心臓を患っている病人向けの静かな愛。確かに左隣の女性は、おそらく数年来、扁平で繊細な胸郭を診ている医師の軽い触診を今朝も受けた。

諦観して薄目を開けている空ろな死人の眼差しから、わたくしが思い浮かべるものは何なのか？ …アッ、そうだ。茹でた仔牛の小さな顔だ。

聞き取れない海の眩き——催眠術的の子守唄のチャブチャブだ。

「まだ15分ある。皆で眠ろう。」

我がスパツァヴェント山がわたくしに何キロも彼方から送ってくれる北風の息吹が、わたくしの意識を冴えさせてくれる。枯れた梢が嵐と狂乱の轟音に揺れ動きながらも、山は丸裸で清明だ。美しい！穏やかな海よりも、もっと美しい。

「わたくしは、あの上に登ってゆきたい。…わたくしは冷たい霊気を渴望している。そこなら…眠れる！」

暑い静寂。風の海。自然の皮肉な休憩。

そして、完璧に徹る声が喝破したことばに混じって、あからさまで間延びした哄笑——それは駆けながら空気と心臓に侵攻して展開する女たちの哄笑なのだが、その〈対照〉が、わたくしたちの意表を突く。

わたくしは咄嗟に階段の方を振り向く。余りに純白で緩やか過ぎる他の丘陵地は、自分たちの周囲をやつとの思いで廻っている。

それは、階を王侯の足取りで降りてくる素敵な女性だ。足取りにも、振る舞いにも、笑顔で詮索する眼差しにも、寓意と威厳が並外れて和合している。

3名の将校が彼女に随行していて、彼女はその彼らに空気を引き裂く清々しい笑いを再度お見舞いする。半睡状態の懷古主義者たちの丘陵地は、軽度の苦痛に転々している。わたくしは〈茹でた小さな顔〉の色褪せた瞳に、漠然とした煩わしい考えを投げつける。

不協和音に、彼女は悩まされる。不協和音？ いいえ、凶暴な協和音。

事実、それは上流^{セレブ}の女性で、さっき海に背中を向けて欄干^{らんかん}に身体^{からだ}を預けていた女性だ。(彼女は観照しているのではない。彼女には、無限世界を怪獣^{キメラ}でいっぱいにする時間がない。)

彼女はさっと扇形^{おうぎがた}に一瞥^{いちべつ}を送って、雰囲気^{きふき}を察知する。再度笑うと、赤い口には皓齒^{こうし}が輝く。おそらく多少挑戦的でもある所在^ゆ無い静けさに、彼女はうろたえない。

〈茹^ゆでた小さな顔〉が、女性的な悪意ある感想を隣の女性に向かって囁^{ささや}く。とても真面目な連れ合い女性^{まじめ}は、その着込んだ蒼白^{そうはく}さのために、眼^めを伏せる。姉妹あるいは花嫁。わたくしは、俯^{うつむ}いている顔^{のぞ}を覗き込む。彼女は悔^くやんでいるのか、あるいは叱^{しか}っているのか？ それは羨望^{せんぼう}なのか、あるいは傲慢^{ごうまん}なのか？ 彼女は、探究心^{くわく}剥き出しで、決して陽気な集団^{グループ}なを眺めやることがない。ああ、そうだ！ 一度チラッと瞳^{ひとみ}を半周させた！ …

きっと、辛辣^{しんらつ}な男性患者^{たけい}が、その空気^きに罪^{つみ}の匂^{にお}いが漂^{ただよ}っていると、それ相応^{さうおう}の良心的なことばをかけて、彼女に危険^{けんけん}を知らせたのであろう。わたくしには、無垢^{むく}な鼻翼^{びよく}が未知^{みち}の香り^{かおり}を多少とも感じ取ろうと欲^ほして、ヒクヒクしているように思える。

そして、その女性^{おんな}は、土瀝青^{アスファルト}に6個^{はくしや}の拍車^{はくしや}をチリンチリンと笑い声のように鳴らして、平然と自分の愉快な話を続ける。

3人の誰一人として、とても派手な制服^{せいふく}にもかかわらず、人を魅了する力では彼女と張り合うことができない。悲しく屈服した眠気^{ねんき}を誘う世界^{せかい}にあって、彼女は生き生きとした唯一^{ゆい}の存在^{そんざい}で、均整^{きんせい}のとれた長身女性^{ながみ}なのだ。

餌食^{えじき}と強奪^{きやうだつ}向きの女。わたくしは、その抑制^{しやく}した衝動^{しょうどう}的^{てき}仕種^{しぐさ}から、淫蕩^{いんとう}なしがらみから脱しても、すぐに元^{もと}の木阿弥^{きあみ}になってしまう彼女の姿^{すがた}を連想する。

その周囲^{まわり}に、彼女としけこむに相応^{さうおう}しい男^{おとこ}が見当たらない。

テラスの奥^{おく}の鞆^{たん}は空^あいていた。美人^{びじん}がそこへ駆けてゆき、綱^{ロープ}にしがみついて、めくるめき虚空^{こくう}に身^みを躍^{おど}らせる姿^{すがた}を見る。ひとりの将校^{しょうこう}が、彼女の背^せをますます強く押している。彼女は恐れを知らない。高みで、ケラケラと笑う。こうして無謀^{むぼう}な行為^{こうゐ}を好む彼女の揺るがぬ意志^{いし}は、人生^{じんせい}でも、常に浮き沈み^{うきしづみ}をめざしているはずだ。

急にやってきた優雅^{エレガント}な一団^{いつだん}が、彼女のことを噂^{うわさ}している。

哲人^{てつじん}のことばで武装^{ぶさ}した女性^{おんな}たち—— そんな素振り^{すぶり}も見せず、噂^{うわさ}ばなしの組上^{そじやう}に上^{のぼ}った者を失墜^{しつたい}させる処世術^たに長けた師匠^{ししょう}たちのベチャクチャしゃべる話し声。

「綺麗^{きれ}ね、そうじゃない？」

「とても。」

(柄付き眼鏡^{けつきめがね}がキラリと光る)

「…背が高すぎるようね。」

「ほんとに…でも、とっても洗練^{パリ}されている。巴里^{パリ}向きね。」

(考え込むような羨望^{せんぼう}のひと時^{ひととき}があって)

「…でも、醜^{スキャンダル}聞^きまみれだって！ 夫^おと別居^{べつこ}中で…派手^{はで}に騒ぎ^{さわぎ}を起こして…憶^{おぼ}えてるわ…去年…そうだったわ、わたしも居合わせたもの、旅館^{ホテル}で。彼女^{かのじょ}って…」

ピョン！——^{ブランコ}鞦韆の腰板から、美人が^{かっこう}格好良く飛び降りる。彼女は軍服姿の家来を連れて飛び去って、破天荒な彼女の過去を物語ったことばが、まだ漂っている空気の輪を引き裂く。彼女は、女特有の繊細な才能であり、骨の折れる女性の^{ししゅう}刺繡である陰口、あらゆる^{ほころ}綻びがすべて罫になる陰口の^{バクテリア}病原菌を持ち去る。

4人の^{ししゅう}刺繡をしている女性たちは、彼女がさっと通り過ぎる間、沈黙する。懐古主義者たちは、銀の騒音から解放されると、これ幸いとばかりに太陽で熱せられた^{ビーチチェア}安楽椅子にもう一度跳び込む。^{ビーチチェア}安楽椅子は、リヴィエラ海岸の優雅な温室に栽培されている貧血症の花だ。

空気は、亡霊と^{ひか}控えめな甘いことばに満たされる。疲れを知らない女たちは、完璧に左右対称の調和した^{デザイン}図柄に穴を開けるだけでなく、最高に^{けんろう}堅牢な評判ですら、こともなく失墜させるような古風な罫の裂け目まで作る編み針を何本か使って、そっと骨の折れる作業を再開した。

すべては元の本^{もくあみもど}阿弥に戻り、力なく打ち震えて死んでいる。けたたましい美人と一緒に、^{すこ}健全な生活はどこかへ逃げ去ってしまった。

今は温かい毛皮を着たこれらの^{しがいまいそう}屍骸を埋葬するために、小柄な^{じい}爺さんがやって来るばかりだ。

フレスキはわたくしをサルソマッジョーレ温泉⁵³⁾へ行かせることに決める。たぶん^{どろ}泥療法と入浴療法で、わたくしは元気になるだろう。

わたくしは出発する。ピーナと連れだって、^{ヨウソ}沃素泉で有名な町に到着する。ジュリオは軍服姿で、わたくしたちに連れ添ってくれる。やがて、彼は優しい女友だちにわたくしを^{ゆだ}委ねてから立ち去る。彼女は、わたくしのために、輝かしい^{ヴァカンス}休暇の季節を断念しなければならなくなるだろう。実に、三度の入浴療法と泥療法後、体温は40度2分に上昇した。

医師を待っている間、わたくしはピーナに『未来派主義者マファルカ』を大きな声で読んで聞かせる。彼女には、たとえその考えを同じくしなくても、未来派を評価して欲しいと思う。事実、わたくしは彼女の^{アブリオリ アイロニー}先験的な皮肉が少しずつ強い関心に変化するべきだと考えている。やがて、彼女は片や同意し、片や異を唱える。ここが肝心なのだ！少なくとも、議論するのだ。

ファルキ教授が、遠慮がちに^{ドア}扉をノックする。わたくしは、自分の病気のことを忘れてしまっていた。今回も大言壮語の馬鹿が体现している^{サイエンス}科学のせいで、自分が発熱していて、話すのも^{こうふん}興奮するのもよくないことを想起こす。

それから、彼は、サルソマッジョーレ温泉はわたくしの病気治療に不向きだから、すぐにここから立ち去らなければならないとおっしゃる。…わたくしは、ぼんやりと彼を^{なが}眺める。彼らの云うとおりになれば、^{ローマ}羅馬出身の名うての教授殿がわたくしを送り込もうと^{かくさく}画策している^{シナリオ}筋書き通りになってしまうことは判りきっていた。それは、^{てんきよう}癲狂院なのだ！

だいぶ調子がよい。

ある日、わたくしは^{ホテル サロン}旅館の大広間で軽く^{ボストンダンス}慕士頓舞踊⁵⁴⁾まで踊ってみせる。

わたくしは、自分の不運極まりない^{きず}創が早急に閉じることはないとの考えに^{なじ}馴染んでゆく。自分の腹部を念入りに^{ほうたい}包帯で^{くく}括ておく。気長に病気の^{すう}帰趨に^た耐えることにする…でも、^{チーベ}結核患者だけは、^{めん}ご免だ！…不^{インポテンツ}能な^{サイエンス}科学も^{めん}ご免だ。お前は、全世界の^{かんせんげん}感染源となる最悪の^{バチルス}桿菌だ！

註および参考文献

本稿の翻訳に使用したイタリア語原文テキストは、Enif Angiolini Robert (1886–1976), *Un ventre di donna: romanzo chirurgico con Filippo Tommaso Marinetti* (Facchi, Milano 1919) で、今回はその第8章–第10章分に当たる第114頁から第161頁までを本邦初訳として試みに日本語に訳してみた。

- 34) 膀胱 urinary bladder (vescica urinaria, cystis urinaria) — 骨盤内恥骨結合背後に位置する容量約500mlの平滑筋層（内縦・中輪・外縦の3層構造）+線維膜+粘膜からなる筋性嚢状臓器。男性では直腸の前に、女性では膣と子宮の前にある。底部には、左右尿管開口部と尿道出口とで作る膀胱三角が見られる。通常は膀胱内圧が400ml/cmH₂Oに達すると、尿意を感じる。
- 35) 生化学（的）検査 biochemical examination — 疾患や病態診断を目的として、生体資料（血液・便・尿）中の化学成分を試薬などを用いて分析・検査すること。例えばホッペーザイラー試験 Hoppe-Seyler test のように、一般に考案者の名前をつけて《～テスト》と呼ばれるものが多い。参考までに、渡辺良孝編『ポケット医学英和辞典』（医学書院 1994）をひもとくと、46頁にわたって（p. 1303–p. 1349）夥しい生化学的検査法が紹介されている。
- 36) リーダ・ボレリ Lyda Borelli (1887–1959) — エレオノーラ・ドゥーゼの衣鉢を継ぐジェノヴァ出身のベル・エポック期を代表する舞台女優で、1904年に初舞台を踏み、1913年、映画界に登場すると、雄弁な身振り言語でもって、たちまち〈ボレリ旋風 borellismo〉を巻き起こし、5年間に『悪の華』や『マロンブラ』など13本の映画に出演したが、1918年にヴィットリオ・チャーニ伯爵と結婚して銀幕のスターの座を無声映画女優フランチェスカ・ベルティーニに譲った。オペラ作曲家ジュゼッペ・ヴェルディが私財を投じて音楽家のための養老施設 Casa di riposo per musicisti をミラノ市内に建設したように、ボレリも舞台俳優の老後を保障するための養老施設 Casa di riposo per artisti drammatici をボローニャ市サラゴツァ街に建てている。
- 37) 括約筋 sphincter — 管腔臓器開口部および穴周囲を輪状に取り巻く絞扼作用筋で、自律神経支配の不随意平滑筋からなる瞳孔括約筋、Oddi括約筋、膀胱括約筋、内肛門括約筋などと、随意横紋筋からなる尿道括約筋や外肛門括約筋などに分類される。
- 38) 套管 cannula — 管腔に套管針を嵌め込んで、腔内に挿入し、套管針を抜き去って、套管を腔内液の排出誘導路とするための器具。
- 39) メッシーナ・レージョ＝カラブリア大震災 — 1908年12月28日に起きた大地震（M7.2）のことで、発生した津波の影響で死者数7万5千人に上った。シチリア島はアフリカ・プレートに属し、イタリア本土のヨーロッパ・プレートとの境界上にメッシーナ市は位置している関係で、18世紀ドイツの文豪ゲーテがイタリア滞在中にメッシーナ市を訪れた数年前にも大震災に見舞われている。
- 40) 開創器（鉤）[wound] retractor (retractor hook) — 腹部正中切開創を拡張するために消化器外科手術で汎用される全長20センチ、30センチ、35センチ各サイズのゴッセ開創鉤や、組織や臓器の牽引・圧排用扁平鉤（筋鉤）や腹壁圧排用鞍状鉤や自在に折り曲げられる臓器圧排用の自由鉤などがある。
- 41) 21世紀イタリア女性詩人パトリツィア・ヴァルドゥーガ Patrizia Valduga は、詩集『薬剤 Medicamenta』の中で、この箇所のエニフ・ロバートの前衛的詩作法に詩想を得たと思われる次のような十四行詩を発表している。
- Vieni, entra e coglimi, saggiami provami... 来るの、入るの、摘んで、試して、感じてよ…
 Comprimimi discioglami tormentami... 押えつけ、ほぐして、責めるの…
 Infiammammi programmami rinnovami. 興奮させ、操って、さっぱりさせてよ。
 Accelera... rallenta... disorientami. もっとはやく…もっとゆっくり…混乱させるの。

- Cuocimi bollimi addentami... covami.
 Poi fondimi e confondimi... spaventami...
 Nuocimi, perdimi e trovami, giovani.
 Scovami... ardimi bruciami arroventami.
 Stringimi e allentami, calami e aumentami.
 Domami, sgominami poi sgomentami...
 Dissociami divorami... comprovami.
 Legami annegami e infine annientami.
 Addormentami e ancora entra... riprovami.
 Incoronami. Eternami. Inargentami.
- 煮て、ゆでるの、歯を立てて…抱くの。
 メロメロにして、困惑させ…びっくりさせて…
 傷つけ、正気を奪って、モノにして、玩ぶの。
 探し出して…炙って、焼いて、灼熱にしてよ。
 縛って、殴って、下ろし、持ち上げるの。
 手なづけ、ぎょっとさせ、怯えさせるの…
 ばらばらにして、貪ってよ…味わうの。
 縛り上げて、沈める、抹殺してとどめを刺すの。
 眠らせるの、もう一度入って…試し直すの。
 栄冠を授けて。不滅にして。銀ピカにして。
- 42) 塩化ナトリウム NaCl — 古来海水を原料とする製塩業が発達をみたが、この元素は食塩として生物の生存に不可欠の要素。1807年にデイヴィー H. Davy が元素であることを明らかにした。単体の塩素 Cl_2 は水道水の消毒に使用され、黄緑色・刺激臭のある気体塩化水素 HCl 水溶液の塩酸は試薬や工業原料として、また安定な塩化ビニル $\text{CH}_2 = \text{CHCl}$ の高分子は塩ビとして広く使用される。有害な有機塩素化合物には、PCB やダイオキシンが有名である。
- 43) 沃素 (沃度) iodine; I_2 — 1811年に発見され、ギリシア語の紫色 iodes にちなんで命名された原子番号 53、原子量 126.9045 の元素。臭素と同様に合成ギリシア語 halos (塩) + gennos (つくる) で総称されるハロゲン (周期表 17 族) に属し、常温では黒紫色の固体。人体中に 20–50mg 存在するが、その 60–80% は甲状腺ホルモンのチロキシン成分として甲状腺組織に特異的に集積する。1986年のチェルノブイリ原発事故や 2011年の福島原発事故のように環境中に多量の放射性沃素が放出されると発癌が懸念され大問題となる。核医学検査・治療用の放射性医薬品として、沃素 123-MIBG, 同 125, 同 131 が使われる。ハロゲン原子は電気陰性度が大きいので、電子 1 個の付加で希ガス構造に変化して、電氣的に陽性のアルカリ金属やアルカリ土類金属などとイオン結合性化合物を形成する。その典型が塩化ナトリウムである。
- 44) 臭素 bromine; Br_2 — 1826年に発見、ギリシア語〈臭い bromos〉にちなんで命名された赤色ないし赤褐色の揮発性有毒液体ハロゲン (周期表 17 族) 元素。臭化銀 AgBr は写真感光材料として使用される。臭化物は金属と反応した臭素二元化合物で、臭素中毒の原因になる。催眠薬・鎮痛薬や農薬に使用。
- 45) 塩化カルシウム CaCl_2 — 1748年カルシウムが生体必須元素であることが判明。十二指腸など上部腸管で食物から吸収率約 50% で吸収されたカルシウムは、体内では 2 価のカルシウムイオン (Ca^{2+}) として、その約 99% が骨格および軟組織中に、約 0.9% は細胞内に、残り 0.1% が血液中に存在。その濃度はカルシトニンと副甲状腺ホルモン (PTH) によって平均 9.0mg/1dℓ の一定値に維持される。マグネシウム同様に、細胞内で血清中の約 45% のカルシウムは、アルブミンやグロブリンなどの蛋白質と結合して、細胞外液に比して 1 万分の 1 のイオン勾配を作り出し、外部からファーストメッセンジャー刺激を受けると、セカンドメッセンジャー (細胞内伝達物質) として作用する。
- 46) マグネシウム magnesium; Mg — 1808年に発見された銀白色のアルカリ土類金属元素で、命名はマグネシア産に由来。原子番号 12、原子量 24.305。炭酸マグネシウム (MgCO_3) (胃の制酸剤として使用)、硫酸マグネシウム (MgSO_4) (腸蠕動運動促進作用および腸管粘膜水分吸収阻害作用のゆえに緩下剤として使用)、塩化マグネシウム (MgCl_2) として自然界に広く分布、1926年に生体必須金属元素であることが判明。小腸での吸収率は約 21–27% で、その内の 60–65% は骨に、27% は筋肉に、6–7% は全組織に、1% が細胞外液中に貯蔵される。現在でも生化学的役割のすべては解明されていないが、300 種以上ある酵素反応での酵素活性化に寄与するとともに、細胞内で ATP と結合して、エネルギー源となる酵素 ATP アーゼ作用を活性化し、ナトリウム-カリウムポンプやカルシウムポンプで ATP アーゼが作用する際にイ

オン濃度の勾配こうばいを維持する一方、メッセンジャー RNA を付着させて DNA 合成に関与する蛋白質合成調節因子でもあり、カルシウムとの摂取比 1 対 1 に摂れば循環器病予防の作用を発揮する。マグネシウムは葉緑素を構成し、植物の光合成で中心的役割を担う。

- 47) 燐 phosphorus; P — ギリシア語の光 phos + 運搬者 phoros に由来する元素で、原子番号 15、原子量 30.975 の燐石灰として自然界に広く存在。1669 年にヒトの尿から燐が単離されたが、生体中ではポリ燐酸と呼ばれる ATP (アデノシン 3 燐酸) や ADP (アデノシン 2 燐酸) が、生化学反応にとって重要な役割を持つ。遺伝情報を担う DNA や RNA といった生体物質では、燐酸が糖とエステル結合している。現在、燐は燐酸カルシウム $\text{Ca}_3(\text{PO}_4)_2$ から工業的に生産され、臘状固体で空気中で自然発火しやすい猛毒の黄燐 P_4 、真空中で黄燐を約 300°C に加熱して生成され、マッチの原料となる弱毒性の赤燐 P、黄燐を高圧下で熱して生成される無毒の黒燐 P などの同素体がある。20 世紀の世界大戦中に化学兵器として開発された毒ガスには燐化合物が多いが、なかでも猛毒サリンは有名である。
- 48) リチウム lithium; Li — 1817 年にスウェーデンの化学者アルファドソンがベタル石中に発見し、ギリシア語の石 lithos にちなんで命名したアルカリ金属類元素。原子番号 3、原子量 6.94。1949 年に炭酸リチウムの躁病治療効果が発見されてから、急性躁病や躁鬱病の再発防止に精神科で使用。他に、白血球増加・血圧低下・ペプチドホルモン作用・生体リズム変化作用などが判明しているが、その作用機序の詳細は不明である。おそらく細胞内情報伝達酵素のアデニル酸シクラーゼやイノシトール-1-ホスファターゼあるいはグアノシン-5'-3'リン酸結合蛋白質を不活性化させるのではないかと考えられている。血中作用濃度は $5.5\sim 8.6\mu\text{g}/1\text{ml}$ で、 $10\mu\text{g}/1\text{ml}$ を超えると多尿・胃腸障害・無気力・運動失調・痙攣・精神錯乱・昏睡・腎不全などの中毒症状が出現、 $24\mu\text{g}/1\text{ml}$ 以上では、生命に危険な状態に至る。
- 49) ラジウム radium; Ra — 原子番号 88 のアルカリ土類金属放射性元素。1898 年、M. キュリー Curie [Marja Skłodowska] (1867-1934) が発見し、放射性を意味するラテン語 radius から命名した。その後 4 年がかりで、1902 年初めて UO_2 を主成分とする 瀝青 数トンから純粋ラジウム塩を 100mg 単離した。硫酸ウラニルカリウム $\text{K}_2(\text{UO}_2)(\text{SO}_4)_2 \cdot 2\text{H}_2\text{O}$ が放射線を出すことを A. H. ベクレル Becquerel (1852-1908) が発見しベクレル線と命名して以来、放射性同位体研究が推進されるようになった。放射性同位体 RI には天然のものと人工のものがある。放射線には α 線、 β 線、 γ 線の 3 種類があり、ヘリウム He 原子核 α 粒子の放出現象を α 壊変 (崩壊) と称し、原子番号が 2 つ、質量数が 4 減少して、他の元素に変化する。逆に電子である β 線 (β^- 線) 放出現象を β 壊変と称し、原子番号が 1 つ増える。ベクレル線には α 線と β 線があり、前者がヘリウム原子核 He^{2+} であり、後者が電子 e^- であることを解明したのは、E. ラザフォード Rutherford である。原子番号が 84 以上の元素はすべて放射性同位体で、安定な非放射性同位体 75 元素ですら、中には半減期が数億年から数百億年と壊変速度が極端に緩やかな放射性同位体が少なくない。
- 50) ウラン uranium; U — 1789 年発見当時、ちょうど天王星 Uranus が発見されたので、それにちなんで命名された天然元素中最も重い白色の重金属元素。原子番号 92、原子量 238.03。ウラン同位体中で、核分裂反応を起こすのは、ウラン 235 で、化石燃料の化学反応で放出されるエネルギーと比較すると、核分裂反応によって発生するエネルギーは、約 100 万倍という巨大さである。
- 51) トリウム thorium; Th — 1829 年に、スウェーデンの化学者ベルセーリウス (1779-1848) がトール石の中に発見した原子番号 90、原子量 232.0、クラーク数 38 位のアクチノイド元素。M. キュリー Curie が初めてトリウムが放射線を出すことを発見した。医療分野でコバルト $^{60}_{27}\text{Co}$ が医療器具滅菌用に、またガリウム $^{67}_{31}\text{Ga}$ が腫瘍検出に使われるように、トリウムも放射線検査に使用される。
- 52) 頻脈 tachycardia — 生理的頻脈と病的頻脈があり、前者は激しい運動時や発熱や交感神経刺

激状態に見られる洞房結節刺激性のもので、後者には心房頻拍・心房細動・心房粗動・発作性上室性頻拍・房室接合部頻拍・心室頻拍・心室細動などがある。

- 53) サルソマッジョーレ温泉 Terme di Salsomaggiore — ミラノ出身の医師ロレンツォ・ベルジェーリによってミネラル豊富な温泉の水質が高く評価されたのが1839年のこと、建築家ウーゴ・ジュスティが設計し、特に世紀末の東洋趣味を代表する建築様式と内装で有名なベリツィエーリ療養館を中心に、豪華ホテル〈ポッロ館〉Grand Hotel Porro および〈ヴァレンティーニ館〉Hotel Valentini を有する世界有数の温泉保養地。
- 54) 慕士頓舞踊 — Frank H. Norman がカナダのモントリオール刊行の『完全舞踊案内』の中で発表した三拍子ワルツ〈クロス・ウォーク・ボストン〉(または〈フレンチ・ボストン〉) から発展した〈フォックストロット〉など、スキップのヴァリエーションを採り入れたダンスのこと。

以上の註記作成には、以下の諸文献の関連項目を適宜参照した。

南山堂『医学大辞典 MANZANDO'S *Medical Dictionary*』MANZANDO Co., Ltd. Tokyo 1985

『最新 医学大辞典 ISHIYAKU SHUPPAN'S *Medical Dictionary*』医歯薬出版株式会社 1990

『ステッドマン医学大辞典 STEDMAN'S *English-Japanese Medical Dictionary*』(株)メジカルビュー Medical View 社 2004

高木仁三郎著『新版 元素の小事典』岩波書店 1999

伊東広, 岩村秀, 齋藤太郎, 渡辺範夫著『化学物質の小事典』岩波書店 2000

